(三) 狩人を改心させる

ある日、南海は草庵の机に向かつて、心静かに書見していると、空気をつんざく乾いた音がしたかと思うと、庵の屋根に二、三の流れ矢がとんできた。南海は何事ならんと耳を澄して聞くと、裏手の林より猿の悲鳴が聞えてくる。さてはと立ちあがり頭巾をいただき声のする林にかけていつてみると、とある木の梢に二匹の猿が四つ這いになつてうろうろしていた。やがて草木を踏みわけ、半弓に矢をつがえひきしぼりつつ狩人がでてきて、またもねらい定めて矢を放たんとする。南海は大声をあげ「その猿は、我が徒弟なり射殺してならぬぞ」というと、狩人は一瞬驚いたものの、そんなら猿のかわりに射殺そうとしたが、貴殿にとどめられるような次第になつた。どうぞ失礼の数々お許しの程を」とあやまる。南海は「汝は、ただの狩人でないように見受けられる。聞かせていただけるならば素性を話して欲しい」と、礼をつくしていうと、狩人は「誠に語るも恥しいが、私の祖先は平家にして名も高きものなれど、屋島の合戦に破れ、北国にのがれ武士を捨てて、山間の木樵り、土百姓となつて早や数十年、現在は僅かばかりの田畑を拓きて暮しているもので、ここより東南にあたる湯の田と申すところに住み同志五、六十人が細々と暮しているものです。この弓も太刀も当時からの伝わりものであるが、私はわがままもので、家業もつとめず親の教えも守らず、このような殺生なことをしていままでかえりみもしないでいました。何卒よろしく導いて下さい」と長々と話した。だまつて聞いていた南海は大いに喜んで、仏法について語りさとした。狩人はそれを聞きおわるや、手にした矢の根をもつて一眼を刺し改心することを誓つた。南海はこのしぐさにいたく感じ、ただちに真言秘密の教えを伝授した。狩人は家に帰り生れかわつたように家業に励み親孝行をし、決して悪業をしなかつたという。

人はそのままの姿にてたちすくみ、時がたつても動くことができなかつた。

南海は樹上の猿をよびおろして帰ろうとすると、イヌがかけてきて狩人にかみつかんばかりにほえたて、その頭上を前後左右にとびこし小便をたれかけた。それに勢を得た猿どもは狩人の頭巾をぬがし、髪などをかきむしり大いに嘲笑した。それをしばらくみていた南海は押し止め、静かに読経し狩人に向い「汝、今より心を改め、殺生な狩人をやめ親に孝行せよ、しからば助け許す」といいつつ、袖に手を入れ印を結ぶと、狩人はだんだん身が動き始めた。

狩人は全身より大粒の汗をたらたらと流し山伏の前にひざまずき「きようこの近くの林で猿を見つけ、ちようど数本の矢が残つていたので、これは良き獲物と矢を注ぐに、矢は左右にのみ流れてとうとう最後の一本になりこれではならぬと、猿を離れ木に追いあげ近